障害児の学校卒業後の友人関係を耳にして

あるメル友から、知人の息子さんに触れたメールをいただいた。

知人のお子さんは脳性まひで小学校は地域の学校に家族が車いすを押して通ったとか。

中学校は色々と悩んだそうだが養護学校へ行き、高校も養護学校で過ごしているとか。

子どもを養護学校の寮へ「入寮させることは本当に心配だったけど、自主性が育ったというか、自分でできることは自分でするようになったし、友達もできて、家にいるより学校が本当に楽しいみたいなんだよね。

週末には家に帰ってくるんだけど、いろんな話をするときに、心が通じあうと言うか、素の自分のまま（人間対人間だと想う）で会話して、ニコニコになっちゃうんだよね。」と話しているとのこと。

この養護学校の寮生活に関連し、次のような友人からの話を思い出した。

友人によれば、「地域の小、中、高校に通学した電動車いすは何とか操作出来る脳性まひの２０才の青年が、同級生は進学、就職で地域から巣立ち、訪ねてくることもなく淋しい日々を過ごしているので、母親が時々付き添って外出して気分転換を図る日々」とか。

一方、「肢体不自由児養護学校を卒業した方々は、養護学校の寮生活の中で、親元を離れての心の寂しさを互いに支え合った共有体験からか、卒業後も地域で生活している同級生も多いこともあり、大人になってからも頻回に行き来し合い、養護学校時代同様に絆を深めながら支え合っている」とか。

障害児の就学問題は、地域の学校か、それとも養護学校かの議論もあるが、こうした友人、また、メル友の知人のお子さんの話を耳にすると、どちらが望ましいかは大人の論理で一概に云えないような気がしてくる。

要は、地域の学校、養護学校のいずれにしても、子ども当人自身が同級生と共に生きてる喜びと生きる勇気を得る学校生活を過ごしているかどうかでないだろうか。

親、教師を含め周りの大人が、そこをしっかり見守り、支え、連携することこそが大事な気がする。

阿部幸泰　　（2009 年 5 月 16 日　記）